信心銘講話

258
127

特51
841

釋宗演禪師著

銘講話

東京 鴻盟社

明治
'40 8 4
内交

開講偈（於下田佛教講習會）

鷗聲帆影夕陽閑。投錫豆南古海關。

至道無難又無易。太平殿上坐看山。

右　楞伽　艸

信心銘講話

釋宗演禪師提唱

信心銘

大唐勅賜鑑智大師僧璨撰

至道無難。唯嫌揀擇。但莫憎愛。
洞然明白。毫釐有差。天地懸隔。
欲得現前。莫存順逆。違順相爭。

是爲心病。不識玄旨。徒勞念靜。
圓同大虛。無欠無餘。良由取捨。
所以不如。莫逐有緣。勿住空忍。
一種平懷。泯然自盡。止動歸止。
止更彌動。惟滯兩邊。寧知一種。
一種不通。兩處失功。遣有沒有。
從空背空。多言多慮。轉不相應。
絕言絕慮。無處不通。歸根得旨。

隨照失宗。須臾返照。勝郤前空。
前空轉變。皆由妄見。不用求眞。
惟須息見。二見不住。愼勿追尋。
纔有是非。紛然失心。二由一有。
一亦莫守。一心不生。萬法無咎。
無咎無法。不生不心。能隨境滅。
境逐能沉。境由能境。能由境能。
欲知兩段。元是一空。一空同兩。

齊含萬象。不見精麤。寧有偏黨。
大道體寬。無易無難。小見狐疑。
轉急轉遲。執之失度。必入邪路。
放之自然。體無去住。任性合道。
逍遙絕惱。繫念乖眞。昏沉不好。
不好勞神。何用疎親。欲趣一乘。
勿惡六塵。六塵不惡。還同正覺。
智者無爲。愚人自縛。法無異法。

妄自愛著。將心用心。豈非大錯。
迷生寂亂。悟無好惡。一切二邊。
良由斟酌。夢幻空華。何勞把捉。
得失是非。一時放卻。眼若不睡。
諸夢自除。心若不異。萬法一如。
一如體玄。兀爾忘緣。萬法齊觀。
歸復自然。泯其所以。不可方比。
止動無動。動止無止。兩既不成。

一何有爾。　究竟窮極。　不存軌則。
契心平等。　所作俱息。　狐疑淨盡。
正信調直。　一切不留。　無可記憶。
虛明自照。　不勞心力。　非思量處。
識情難測。　眞如法界。　無他無自。
要急相應。　惟言不二。　不二皆同。
無不包容。　一念萬年。　無在不在。
十方目前。　極小同大。　忘絕境界。

極大同小。　不見邊表。　有即是無。
無即是有。　若不如是。　必不須守。
一即一切。　一切即一。　但能如是。
何慮不畢。　信心不二。　不二信心。
言語道斷。　非去來今。

○鑑智禪師

支那にて禪宗の初祖を達磨大師と立てる、其れから二祖慧可大師、三番目が鑑智禪師と云ふので、此の鑑智とは唐の玄宗皇帝よりの諡號にして其名は僧璨禪師と申された、信心銘は即ち其の人の拵へたのである。

○信心銘

此の事に就て言ふて置がぬばならぬ、アナタ方はドーー云ふ事に受取つたか知らぬが、銘はイマシメと云ふ事である、此の信心と云ふ事を解釋して參るには止む事を得ず二ッに分ける、アナタ方の分りよい爲に萬止む

を得ず申すのである、一ッの信心は絶對的信心、他の一ッは相對的信心である、(此の言葉は穩かでないか知らんけれ共只その意を取て詞は各々方が直しても宜しい)即ち絶對的信心とは物を客觀的に見たる信心ではない、彌陀とか「ゴッド」とかに依賴をする信心ではない。モー宇宙其れ自身の眞理が信心と云ふ變へ名にしてある、是を眞如とも菩提とも涅槃とも云ひ若くは佛性と云つたり大道と云つたり名前は幾百通りもあるが名の變る如くに品が變る譯ではない、今此の信心銘は其れが本意なれども他の相對的になにか頭へ戴いて

見ると世界は廣し人類は多し、且又宗教も一二にして足らず、印度教あり、猶太教あり、波斯教あり、佛教あり、耶蘇教あり、其の又耶蘇教の中にも色々あると云ふ樣に切りがない、さて如何に宗教其者が分派されても約めて云ふと信心と云ふに外ならぬのである、信ずると云ふのは組織的には宗教となり、個性的には信心となる、其信心に仰信と解信との信じ方がある、所ろが多くの場合の宗教は天啓即ち天よりの託宣の樣なものが、佛典に書いてある、佛が天に代ッて言はせられたと云ふもので、道理に合ふの合はないのは論じない、イヤ實に

託宣は有難いと云ふて信ずる即ち一點の疑を挿まぬのが仰信である、私は禪宗であるが眞宗の教の盛なる田舍へ往くと綿を打つたり糸を紡ひだりして居る人が名號を唱へながら朝から晩まで感謝の念を以てして居る、食事をするにも南無阿彌陀佛、算盤彈くにも南無阿彌陀佛、不淨場に往つても南無阿彌陀佛、往來で倒んでも南無阿彌陀佛、たとへ利刀を以て斬付けて來樣としても南無阿彌陀佛で受ける、然るに少し許り學問のある者は疑ひ始めて遂には大なる道理を疑ふのである、ソヽデ宇宙の眞理は解すべからず抔と云ふて實

地の修行する事を知らずして瀧の中へ飛び込だり噴火口へ飛び込だりするのは實に情けない、此點からみれば、仰いで信ずる事の出來る者は實に幸いである、ドンナ逆境に處しても有難い、阿彌陀樣が我が信心の不確を試めすためにコー云ふ目に遭はせて下さるのは有難いと云ふて居る、是が消極的許りにあらずしてサカの時は積極的の勇氣も出るのである、然るに追々と智慧思想が出て來ると疑を發して來る、始めには宗教を信じてスナヲで有つたのが少しく學問でもするとソー往かなくなる、神の子たる人間が不完全なる者

の多いのは何共ケシカラン話である、一體其神とはドー云ふ者であるかと、一々道理に訴へるとになる、世界の大勢を眺めると學者が宗教に對するの思想は益々盛にして、近頃は比較宗教が顯れて來た、そこで、哲學の方式に合ッたのが合理的宗教で、學問の道理に合はぬのは迷信的宗教である、其迷信で世界を闇にする宗教を排斥してナンデモ合理的のものを用ひねばならぬと云ふとに成つて來た、果して道理に合ふ教だから信ぜねばならぬのであるとコー云ふ信じ方が解信である、佛教が世界各國の間に於て少しづゝ佛の光明を放

ち掛けて居るのは感情一片の信仰ではなく多くは學問の方からである、それに依つて今は未だ何千人何萬人と云ふ佛教信者のある譯ではない、即ち佛教は學問的方面から持て囃されて居る、今や歐米の各國に行はれ樣とする佛教は即ち此の解信の方である、仔細に見ると佛教は純然たる學説の樣にもある、併し乍ら佛の意は決して一の學問として世の中に唱へられたのではないと思ふ、ツマリ、佛は多くの者が迷信に陷つては世の中を暗くするから其慧眼を昧まさない樣に學問的に組織的に眞の信心を呼び起そふと云ふのが佛の

目的である、其目的を達するには實行するのが肝要である、又實行するには厚い信仰がなければならぬ、此の信ずると云ふ事と行ふと云ふ事の二ッがあつて、信行の二ッは竪糸と横糸のやうな者にして竪横の糸により美麗なる反物が織り成されたるは此の佛教である、いはゆる學説に訴へるのは方便で信心が佛法の大趣意である、あらゆる宗教は仰信と解信との二に帰するが學問の無い宗旨になると感情に許りなる者であるから盲目的信仰である、鰯の頭も信心からで天理教蓮門教の如く盲目的なのがある、佛教の端しばしにもソー

云ふ迷信がある、佛は三千年已前に於て成道せられ最初鹿野苑の説法より、終り跋提河の入涅槃に至る迄三百餘會縱横無盡に、八萬四千の法門を説かれたが、要するに此の信心の外ではない、只今茲で一分間か二分間默考を授けるのである、蓋し眞理は耳で聞き目で見て夫れで盡きると云ふ譯ではない、能く能く實考せなければならぬ、實考は心を見るのである、何にも六ケしい譯ではない、肉眼をキョロ〳〵して六根を六境に對して居るから障子一重向ふが見へないのぢやが、引繰返へして自心を眺めて見ると大なる宇宙の道理を小な

る方寸の裡に顯はすとが出來る、今日の進んだる學問の上の眞理も其れである……、百年萬年の昔が即ち今である、今この目の前の一微塵が過去幾千年前の火雲なり光線なりで此の見臺此の椅子乃至此の地球も太陽も皆一念頭上に露堂々と顯はれて居る、平らたく云ふて見ても妙法蓮華經、南無阿彌陀佛を顯はし十萬億土を顯はすとが出來る、即ち物我不二の當體を發見するとが出來るのである、私が默考なさいと云ふ事は其れである、如何程耳にタコの出來る程聞ても聞た許りではダメで如實工夫と云ふ事が大事ぢや、されど今は

専門的禪宗の坐禪とせず平らたく靜坐として勸めるのである、公案と云ふ六ケしい事に據らぬでもよい、佛の經文にある首楞嚴三昧とか海印三昧とか云ふ事も皆この消息である。

毎日幾かの間でも此の默考をするときは其功驗は一日にも一年にも向ふかも知れぬ、是れは通俗の式であつて禪の專門的ではないが、此の默考をすれば心に明かに了解が出來る。

是れより此の本文の中へ這入て辯を付けるのである、大體吾が佛心宗は古人が云はれた通り「我宗に語句なし更に一法の人に與ふるなし」で元來佛の心を以て心とする宗旨には文字言句の沙汰は無い更に一法の授くべきなしぢや、コチラから向へ授ける物は毫もないもしあらば實は人々お互が持て居る人々具足個々圓成して居ると云ふのが禪宗の持前である、理論已上ぢや、世界の道理は論理を以て云ひ顯はすけれ共此の佛心宗の一着子は言句已上思想分別已上ぢや、言句分別已上にて此の法を顯はすのに古人は往々詩を以て言ひ顯はして居る、即ち言句を絶した處から道の妙處を詩即ち歌に唱へ出したる此の信心銘である、丁度秋に

なると轡蟲や鈴蟲も自然を吟じ春になると鶯が天然を囀づり出す是は天地の眞理其まゝの聲ぢや、又夏になると雷を以て天然を歌ふ冬になると北風が歌ふ、天然自然に無言の言非思量の思量にして言ひ顯はしたものである、始終此の詩的考へがないと妙味が薄い、日本の歌とか俳句の様なものでも一寸趣味が分るのであらふ。

○至道無難

是が信心銘の一大眼目ぢや、此の至道無難の四字が信心銘一篇を貫いて居るのである、されば至道とは至極

の大道と云ふと、至極の大道の云ふ時に於ては後とから付けたる神道とか佛道とかの如き對峙的のものではない、絶對的の大道ぢや、此の大道をば、假令神佛と雖も私する事は出來ぬのである、若し私する事が出來たならば、大道とは云へない、此の大道は天下の往來の如くにして王公貴人も通り、車夫馬丁も通行し、猫や犬が歩行ても妨げぬ道が至道である、前に信心と云つたのと、此の至道と同じ事である、此の至道を通行するには無難ぢや、此の難き事なしと云ふ中に易しと云ふ事が含んで居る、併し乍ら此の無難は難易を飛び越へたの

で即ち比較すべきものでないのである、至極の大道と云へば強て人情に隨つてそれでは六ヶ敷いものであらうと云ふのが人情であるから難き事なしと云ふたのぢや、孟子は「道は邇きにあり」又は「易きにあり」と云ふて居る、至極の大道と云ふとドウも遠方の様に思ふけれ共其の實は鼻の先きにもあり足下にも至道を踏で居る、行住坐臥立居振舞の上に働て居る有様、此の當體は至道無難ぢや、此の至道と云ふものは過去の過去際より未來の未來際迄我道一以て之を貫せりぢや、元來難易はない。

○唯嫌揀擇

揀擇は「エラブ」と云ふ事、即ちエリキライをする事である、是を取り彼を捨てるのが揀擇、迷を捨て悟を擇ぶ、凡夫を捨て佛を擇ぶのが皆揀擇である、凡聖迷悟有無得失と捨てたり擇んだりするから至道が六ヶ敷なる、即ち物を二ッにする……、是を愛し彼を憎みてエリキライするから、至道が六ヶ敷なつて仕舞ふ、故に佛が鹿野苑に下つて說法已來頓漸半滿藏通別圓と說法度生せられた……只揀擇さへ無ければ至道は無難ぢや、此の當體より一休和尙は通俗的に歌はれた、

釋迦と云ふ徒ら者が世に出て、
多くの人を迷はするかな

と色々の番茶を入れたのも至道の見地より見れば入らざる事である。

○但無憎愛。洞然明白。

一ッを憎み一ッを愛するのを憎愛と云ふ、妄想と云ふのも凡夫と云ふのも最早憎愛の二字を免れない、箇樣に憎愛と憎み愛する事なくば洞然として明白ぢや、洞らかにして明々白々である、仰で天象を眺めると日月星辰璨然として光を放ち、伏して地上を臨めば山河大地草木國土悉く輝を發してをる、鳶飛で天に登り魚淵に躍る何一ッ包み藏したるものはない、至道は太陽の如し太陽其ものは晝夜の隔てなく輝て居る、然るに憎愛と云ふ霞みが懸るゆえ至道と遠ざかるのである。

○毫釐有差。天地懸隔。

毫釐とは兎の毛と云ふ事極纔かの事を云ふのである、心に於て一點のアーのユーのと疑を挿だならば一分八間の喩の如く、其れ處ではない天地懸隔すで天と地との隔りを生ずるのである、洞然明白の當體は塵毛一本も留めては置かぬ、心に塵程の差があつては末に至

つて天地の差となる。

○欲得現前莫存順逆

此の現前の二字にて至道の、本體は顯はれて居る、目に一杯耳に一杯顯はれて居るけれ共如何せん心の迷に依て順逆と二つを見て順境に臨んでは愛し、逆境に臨んでは瞋る故に、此の順逆の二見を存してはいかぬ、此の二見を存する故に現前を妨ぐるのである、此の段の韻は仄韻にて陌の韻ぢや。

○違順相爭是爲心病不識玄旨徒勞念靜

此の四句は敬韻であります、始めにあつた揀擇、憎愛、順

逆と云ふ文字を此の違順の二字に顯はしたのである、一切萬法そのまゝが眞理の顯はれたる當體ぢや、然るに是は違であるの、是は順であるのと云ふ樣に、氣に入つた者には順ひ自分の心に違つた者には背くと云ふ風に產み出す、即ち朝から晩まで違に非れば順と云ふ事を以て爭ふのであるから是を心病と云ふのである、此の心病を治するのが佛の仕事である、維摩經には佛は大醫王とある、玄旨を識らざればとは、此の文字の變る爲に目を昧まされてはイカヌ、玄旨即ち至道ぢや、徒らに念靜を勞す、退いて坐禪功夫をするがよい、我が妄

念を抑さへる所の坐禪ではいかぬ妄念を抑へ様煩惱を取り除け様と云ふのは本當ではない、其れは野狐禪である、退いて空々寂々の坐禪に這入らうと思ひ(散亂ではいかぬ)雜念起り煩悶に堪え難き時に於て抑へれば抑へる程亂るゝ、丁度水を澄まさうとて攪けば、かく程濁る如く、一時安靜に成つた狀態を悟りと思ふては大變の相違である、古人が「無量劫來生死の本痴人喚で本來人と爲す」と云はれた、暗證の禪默照の禪と云ふのが其れである、そんならば如何にせば善いかと云ふに、揀擇、憎愛、違順、順逆は心の影法師の樣なものであるの

に其れを實物と思つて抵抗するから抑へれば抑へる程益々揚がり、鎭むれば鎭むる程影が動くのである、其れ故に古人は簡短に俳句で捷徑を示して

田の草を取つて其儘肥しかな

是れは通俗的で適切である、妄想煩惱の心は田の草のやうなものである、其儘置けば草が跋扈して肝腎の稻を害する事である、妄想も其の通り坐禪もせずに修行もせずにして置けば田の草の通り妄想を抑へ付けるに非ず妄想を根から引き拔くのである、又、其れを遠方へ持つて往くには及ばぬ、直にそのまゝ肥しなり藥な

りにする、即ち妄想煩惱を我が手に入れゝば大智慧光明となる、文殊菩薩が「衆生現行の無明は直に是れ如來根本の大智」と仰せられた、又、經相の上にては轉識成智と云ふてある、今迄の第六意識の眞ッ黑の迷ひを引ッ繰返へして四智の働きとなす、(四智とは大圓鏡智、平等性智、妙觀察智、成所作智である)又、貪瞋痴の三毒が法身、報身、應身の三身の働きとなる、今の迷の心を逐ひ出して悟の心を迎へると云ふのは坐禪の仕方ではない、大間違である、それでは折角やつても百千萬年坐禪をしても徒勞である。

○圓同大虛。無欠無餘。良由取捨。所以不如。

是は六魚の韻である、茲へ來ては至道の本體はドンナものかと云ふと……空間は無限のもので我々人間は賢い分別を持てをるが無欠無餘を圖る事は出來ない、如何程學問をしても遂には無窮無極に飯して仕舞ふ、分別の竿を幾ら振り廻はしても無限の空間には屆かぬのである、そこで學問の終局點が始て宗教の發足點になる、あらゆる世間の學問上の智慧を以て想像しても智慧は有限である、圓同大虛は智慧にても及ばない理論でなく直覺――宇宙と自己と一致する南無阿彌

陀佛と一致し、南無妙法蓮華經と一致す、趙州和尚は一無字に投げ出した其れが直覺である、茲に至ると學問の寸尺は迚も茲に届かぬのである、大なる天地へ持て往けば天地と一杯になる、茲に至つては大小だの內外だの我他彼此も離れたるものである、所以に不如なり、如は如々不動と熟字してある、不如は眞理の本體を隱したのである、眞理の本體は生ずる事も滅する事もないが今はそれが反對だ、揀擇だの憎愛だの順逆だの違順だのとこゝが取捨になる、我心に順ふ者は愛するが我心に逆ふ者を憎むと云ふやうになる心其心が餓鬼

道や修羅道を拵へるのである、されば地獄道や餓鬼道は憎愛取捨より起る何にも造り付けの地獄はない、元來眞如は如々不動にして斯の如く現はれて居る、然るに我他彼此を起すから不如である。

○莫逐有緣。勿住空忍。

韻は仄韻軫の韻である、有緣と空忍と裏ハラの事を云ふて居る、有緣は有爲の諸緣と云ふ事で、我々が眼で見、耳で聞き、鼻で嗅ぎ、舌で味ひ、身に觸るゝ處の都て五根を以て、向ふの對境なる色聲香味觸の五境と云ふものを逐ひ廻はす故に心が散亂して、丁度大風に灰を撒いた

様である、空忍に住する勿れ、でなんでも散亂心を止めねばならぬと同時に空忍に住しては尚ならぬ、前で云ふ處の空は頑空の事である、即ち有る物を取り除けた空ぢや、今云ふ至道の本體、玄旨の本體は有、空の沙汰を離れて居る、無いと云ふ事も姿で、又、無い事であらうと思ふとも心の上の姿である、明らさまに云ふと至道無難……、佛でも凡夫でもない、至道無難の此の當體から云ふと、心を働かす上に付て心が散亂せないと云ふと動もすれば鬱憂的に沈で仕舞ふ、それゆえに空忍に住すると云ふのも心の病である、有緣を逐はず空忍を離

れねばならぬ。

○一種平懷。泯然自盡。

一種とは信心、至道、玄旨、の換へ言葉と思ふたらョィ、即ち虛心平氣と云ふ境界、佛の境界と云ふたら虛心平氣である、虛心平氣と云ふ時は地獄だの極樂だの迷だの悟だのと云ふ骨コィものはない、故に趙州和尚は平常心是道と云ふた、味へば味ふ程有難い、泯然として自ら盡く、霜や氷が朝日に溶解する如く、八萬四千の煩惱が消える、つまり一つのコリ塊まりを自分が造り出した、身から出た錆ぢや、生死も盡き罪過も盡き迷も惑ひも

盡きて仕舞ふた。

○止動歸止。止更彌動。

宋の韻ぢや、止と云ふは靜と云ふ字と同意味である、若し動轉して居たる散亂の境界を止めて强ひて靜かなる境界にならうと思ふと、益々搖いて來る。

○惟滯兩邊。寧知一種。

兩邊とは上にある、文字を捉まへれば、動靜となるのである、憎愛、凡聖、迷悟、人我と見ても、又は善惡と見てもよい都て對待的のものは兩邊ぢや、朝から晩まで此二邊に往つたり來たりして、停滯して居る、彼の楠正成公が

愈討死と云ふ場合に臨んで湊川の廣嚴寺に入つて、明極俊禪師の所へ參り禪師に向つて、「生死交謝の時如何」と問はれた、即ち生と死との兩邊ぢや、今云ふ動と靜と同じ事で、生きる死ぬるが交もゝ代謝する時は如何、今死の境界に臨んでどうぢやと眞劍勝負に出た、そこで禪師は「兩頭共に切斷して一劍天に倚て寒し」と答へられた、兩頭も兩邊も同じ事、動靜とも、生死とも云ふ、此の兩頭を切斷して仕舞た時、盡天盡地劍一本ぢや、腰から拔いたものとは違ふけれ共劍に言倚せて云はれた、正成公又畢「竟如何と」問はれた、モー是は言句已上ぢや、

兩邊とか生死とか理屈に渉る事を止めるのである、そこで明極禪師「喝」と斬て放した、そこで正成此の一喝の下に禮拜し去つて、遂に湊川に於て思ふ存分に兄弟同士充分に働きをなして、討死をせられたと云ふ事が歴史上に殘つて居る、是は皇室の爲に身を犧牲に供したのであるが迚も兩邊に滯つては一種の境界は分らぬ。

○一種不通。兩處失功。

是れは一東の韻である、一種の境界が融通無碍にならなければ修行の功力を失ふのである、或時は佛界、魔界、順界、逆界、縱横自在に働きをなさねばならぬけれ共、眞

の平等が分らなければ、差別の境界に足纏ひが出來て來る、元來眞理の現れたるを天台の教にては眞空妙有と云ふ、單に空と云へば、物を取り除いて無いのが空であるが、眞空と云ふ時は眞實のまゝ空ぢや、此の眞空をヒックリ返へせば、妙有と云ふになる、妙有は眞空の上に形ちの現れた姿である、眞空のない當體が妙有の儘、體其儘空である、是れが本當の眞理の有樣ぢや。

○遣有沒有。從空背空。

無と云ふに對しての有は相對である、此の沒有の有は

絶對ぢや、此の有は妙有の有である、相對的の考は妙有の眞理に疵を付けるから没すると云ふのである、空に從へば空に背くで、眞空其儘が空である有を拂ひ除けるの空をなくせるのとしたなれば眞空に背くのである、即ち對待に滞つて仕舞ふ時は絶對の眞理を悟るとは出來ない。

○多言多慮。轉不相應。

我々の想像は今日に照して明日を推量する丈けの力だけよりか持て居らぬ、今云ふ所の眞空妙有だの至道無難抔の境界は饒舌れば饒舌る程遠ざかり、考へれば考へる程隔たりが生ずる、即ち言葉や分別にくゝられば相應せぬのである。

○絶言絶慮。無處不通。

絶言絶慮だから何でも石佛の様になれの金佛の様になれのと云ふ譯ではない、無碍の辯舌を得て即ち文字言句に拘はつて居らぬのが、絶言絶慮である、不立文字にてあらゆる文字言句を拈弄し、あらゆる慮知分別を逞くして少しも其れに束縛せられぬのを絶言絶慮と云ふのである、處として通ぜずと云ふ事なし、融通無碍ぢや、至る處主人公となるのである、臨濟大師は「立處皆

な眞なり」と仰せられた即ち此處である。

○「假根得」旨。「隨照失」宗。

根心に假すると云ふ意味である、一切萬法は木の枝葉の如くである、みな心の本體の根本より現はれ來る、古歌に、「千なりやつる一すじの心より」照に隨へば宗を失すとは、是は自己を取り失ふて前境に着て廻るのである、物が來ると直ぐに心を向けて、其れを見樣とするのが照ぢや、自身の本體に立歸れば至道の玄旨を得るし、若し外物に着て廻はると、至道とは遠ざかつて宗を失するのである。

○須臾返照。勝「却前空。」

須臾とは一念の上に於て即ち色を見る物是れ何物ぞ、聲を聞く物畢竟何物ぞと引き戻して見るのが返照と云ふのである、大燈國師は「直に見て直に聞くなら疑は」じ自らなる檐の玉水」と云はれた。

前空――眞空無相は眞理の換へ名である、前空は假りの空である、無きが如くにして一のサワリとなるのを前空と云ふのである、勝却の却は助字である。

○前空轉變。皆由「妄見」不「用求」眞。惟須「息」見。

前空は權衡の如く轉々變々して居る、それは皆な妄想

分別の見解に依つて出來てくる、唯除妄想、別無聖解と云ふと同じ事、眞を求むる事を用ひず、佛にならう抔と云ふ欲張りの考は止して仕舞ひ、惟だ須く見を息むべし、只々順逆だの憎愛だの乃至佛見だの法見だのと云ふ見を止むるがよい、是を止めれば眞實を求めなくとも眞實は自ら流露する。

○二見不仕。慎勿追尋。

此韻は侵の韻である、此の二見は空有の二見、又は憎愛の二見と云ふてもよい、慎んで追尋する事勿れ、讀て字の通りぢや。

○纔有是非。紛然失心。

纔か許りでもコーだのアーだのと云ふ是非の心の萠す時は麻糸の乱れたる如く心の本體を取り失ふのである、

麻糸の長し短かし六つかしや
有無の二つにいつか離れん

此の麻糸に結ぼれて居るから至道無難が分らぬ。

○二由一有。一亦莫守。

有の韻である、此二は善惡抔の二のみではない、凡そ百も千も一切萬法も皆な二の中に含んで居る、即ち一切

萬法は何處から出て來たか趙州和尚は萬法歸一と云はれた、道は一であると云ふと、又其の一ッに、ク、ッ付く故に、一が障りになるから、一も守る莫れぢや、絶對界には一もなし、然るに一切萬法は此の一心より現れたと云ふて一心に取り付くと、間違ふのである、昔し或る僧が趙州和尚に向つて、「萬法一に歸す一何れの處にか歸す」と詰問した事がある、其答へに「我れ青州に在て一領の布衫を作る重き、こと七斤」と答へられた、七斤とは、七百目と云ふ事ぢや、此則て宗旨の妙を知るがよい、若し一を固守したならば至道無難の當體が分らぬぞ。

○一心不生萬法無咎。

我々の心は元と誰からか授かりて出來たものであると思ふから間違つて來るのである、元來眞理は不生である故に佛法では是を無始と云ふ、無始であるから先祖より先祖と遡つてドコ迄往つても盡きる事はない原因から結果を生じ結果から又原因生じ、始めては終り終りては又始まる、儒者も至誠止む事なしと云ふてある、神樣の拵へた人間は有始無終であるが神丈けは無始無終であると云ふけれども、眞理が無始なれば眞理より現れた姿も無始でなければならぬ、一體神は誰

れが作ッたと云ふと答へが出來なくなる、一心と云ふと何か捉まへ處がありて何處にか奥の院のある樣に思ふかなれ共、さにあらず其實は不生の儘に現れて居る、萬法咎なしで、何れに往くとしても、障りは無い、ッマり心が動くから障りが出來て來るのぢや、天國へ往くとか極樂へ往くとか、又は地獄へ落ちるとか至る處障りが出來て交通無碍の境界に至る事は出來ぬが、一心不生の境界を得たならば、十方通ぜざる處は無いのである。

○無咎無法。不生不心。

此巳下四句の韻は侵韻ぢや、前の處を承けて是は障りと見てよい、障りがあると常に我が心が滯ふる、故に萬境が捌けぬ、若し滯りがなくなれば、無法である、此の無法とは無茶苦茶と云ふ事ではない、一切萬法天にあつては日月星辰、地に在つては山河草木と一切萬法森々羅々と現はれて居るのが無法ぢや、都ての物は法則が備はつて居る故に、佛敎にては物と云ふ事を法と稱して居る、「法は法位に住して世間相常住」と法華經にある、心が處々に動く、動く故に此乎者也が起るのである、元より不生の當體なれば、如何に働いても心の跡形はな

い、丁度其れは鏡の如くであつて、鏡には柳が來れば綠に映り、花が來れば紅に映る、天狗は天狗、おかめはおかめ、漢來れば漢現じ胡來れば胡現ずるも、少しも痕方は付かぬ、即ち其れと同じ事ぢや、功夫して見ぬと分らぬぞ。

○能隨境滅。境逐能沉。

此の沈むだの、滅するだのと云ふのは忘れると云ふ意味である、何にも形の無くなつた意味ではない、能と境と忘れるのぢや、常に教相の言葉では能所と使ふ文字である、能と云ふのは自分が見ると云ふ主動的である、

所と云ふのは見られる、即ち相手方被動的である、凡そ萬法は此の能所を假りて現はれるのである、トコロが能を離れて所なく、所を離れて能なし、眼を取り除けると色が現れぬ、耳鼻舌身の四根も同じことである、一切諸法は五蘊十二所十八界が和合して現れるのである、六根が獨りで相撲は取れぬから六境と云ふ相手がある、是が萬境とか六塵とか名を付ける、六塵とは此の物は動もすると、心を汚がすと云ふ意味より六塵と云ふ、六塵丈けあつたとても働きが現れぬから、六識が手傳ふのである、眼と色との中へ意識が備はり、耳と音との

中に意識が備はつて、あれは三味線の音であるとか、これは太鼓の音であるとか、コヽしたゝめて、三拍子が揃つて始めて微妙の働きが現れる、此等の處は能く〳〵功夫して見ねばならぬのである、昔六祖慧能禪師が南方に布教せられたる時、或る寺に於て二人の僧が幢幡に就て議論をなして居た、一人の僧はあれは風の動くのであると議論をして居るを聞き、六祖大師が其處へ往かれて、風の動くのでも、幡の動くのでもない、「仁者の心動く」即ち諸君の心が動くのである、幡の動くでも風の動くでもなく、貴樣の心

が動くのであると云はれたに付て、此の二人が、成る程と感じて其の境界を得たと云ふことがある、是は禪宗の話ぢやが、よし禪宗の修行を離れて世間の學問の上でも、萬物の性質は我心が與へると云ふ事は違はぬ、即ち心が認識せなければ、何が何だか分らぬ、闇夜の烏暗闇の牛の如くである、今此の一挺の蠟燭の光は何が光るのであるかと云ふ考が起つたら、此の蠟燭を認識するものが無ければ光はない、實は我心が光るのである、心を離せば蠟燭の性質が現れぬ、其れと同じ事で、此の茶碗は茶碗が堅い譯ではない、即ち堅いと認むるもの

自己にあるのである、是では唯心論に傾く様なれ共、更に進で話をしても、此の茶碗の理と一致する、此の茶碗は表部より見るから物質だなけれども内容より見ると生きたる精神である、何にも彼も物其の物質は外部より眺めるからであるが内容を見ると此の心である、昔は東洋にも西洋にも二元論が八釜しかつたが段々研究の結果として、一元論に成つたのである。

都て物と心とは決して二ッに分つべからざるものなれども眺める方面から物と心と二ッに見たのである。

○境由能境。能由境能。

此四句は一東の韻である、始めは滅すると沈むと云ふたが、今度は一切萬法現れて居るのは能と云ふ心の働きに依つて現れると云ふのぢや、即ち心は萬境に依つて現はる、云はゞ一切萬法の現れて居る姿がそのまゝ我顔の如きもの否、一切萬法が即ち我顔、我顔が一切萬法である、我を主にしても萬法を主にしてもよい、又原因結果と見てもよい、我は一切萬法の原因であると同時に一切萬法は又我が爲に原因となる結果も其通り、互に結果となり原因となり、又、眺め様に依つては其主客の別はあるが其實優劣はないのである、是は禪宗的

の理窟許りではない、自然に學問と同じ組織になりてをる、此れは韻文であるから言ひ現はし方が違ふだけである。

○欲知兩段。元是一空。一空同兩。齊含万象。

是は養と蕩との韻である、數字の上の一と兩に見てはいかぬ、餘り絶對的では現はし樣がない故に一と兩とを假りたのである、即ち一切萬象の上に現れて居るのが一空ぢや、平等即差別を說くのが佛法である、平等の側では横より見ても竪より見ても、平等で古今一貫である、その一味平等の上に於て山は峨々として聳へ、水

は洋々として流れて居る、なれども動もすると別々な道理が、二ッある樣に思ふが、實は二ッはない、平等即差別差別即平等である、各々一面から見ると別な考へが起るが、波が水となり水が即ち波となるのぢや、茲に上騰して居る雲や霧も解くれば元の水、元の水が又雲とも雨となる妙ぢやないか即ち無碍と云ふ字が使つてある、心經に「色不異空、空不異色」と云ふ字でもつて云ひ現はされて居る。

○不見精麁。寧有偏黨。

一切萬物一々別の姿を現はした上に於ても佛に偏し

衆生に偏し迷に偏し悟に黨する事はない、所謂「偏なく黨なく王道蕩々」ではないか。

○大道體寛。無易無難。

寒の韻二句宛押韻ぢや、大道の體は廣くして胖かである、至道を今改めて大道と叮寧に云ひ直した。

○小見狐疑。轉急轉遲。

小見は小さな學問、小見識のものは丁度狐が疑ひ心のある如く色々に疑を起す、即ち大疑ではない、小疑を指して狐疑と云ふのである、轉た急なれば轉た遲し、急げば急ぐ程遠ざかる、急げば廻ると云ふ諺の通り、何でも

凡心を轉じて佛心にならうと思ひ、惜しい欲しい憎いは可愛を轉じて光明赫燿たる佛にし樣と、何でも急ぐ時は、益々遠くなる、アセレバアセル程遠い、大道體寛と頭から見破れば無易無難ぢや。

○執之失度。必入邪路。

已下の八句は皆の韻、之を執ればとは、執着する事、世間に於て仕事をするには執着が必要であるが、その場合の執着は大なる意力の事になる、然らずして煩惱妄想に喰つ付く事は云ふに及ばず、悟に喰付き佛に喰つゝき到處に尻を据えると必ず邪路に入る、迷が病なれば

悟りは藥ぢや、其の藥なるものでも健康の者に用ふれば却て毒ぢや。

○放之自然。體無去住。

眞理其儘大道體寛しぢや。

○任性合道。逍遙絶惱。

是迄は大道と云ひ、至道と云ひ、信心と云ふたが、今は一字にして性と云ひ換へた、即ち靈明なる本心ぢや、本心其儘に任じたなら道に合するのである、孔子一代の上で云ふと「十五にして學に志し、三十にして立ち、四十にして惑はず、五十にして天命を知る、六十にして耳順ふ七十にして心の欲する所に從て矩を踰へず」と云はれた、此矩を踰へぬが逍遙絶惱の境界である、能と境と衝突せず外界と內界と融通したのである、心の欲する所に從つて矩を踰へずと云ふ自由の境界に至つては、迷を拂つて悟を求むるにあらず、飢へ來れば食し、昏し來れば睡る、即ち心の欲する儘なれ共法に外れないのである。

○繫念乖眞。昏沉不好。

繫念とは何物にか取り付く事を云ふ、取り付たならば此天眞爛熳に背くのである、そんならば昏沉と云ふて

昏く沉んだのがよいのであるかと云ふのに其れは尙以て不好である。

○不好勞神。何用疎親。

不好なれば神を勞すで、今の學生などが動もすると此膏盲の病に罹る氣の毒でならぬ、何ぞ疎親を用ひん、大道の當體至道の當體より見れば、迷を疎んじ悟りを親む抔と云ふ事は入らぬ事である。

○欲趣一乘。勿惡六塵。

一乘とは佛法の術語である、佛法の道を乘り物に譬へたのは、此の岸より彼の岸に至る、即ち甲より乙に運ぶ

有樣である、三乘二乘一乘と云ふのがある、一乘とは佛の悟りである、唯有一乘法無二亦無三夫れだ、是は眞實に歸した當體、已下二乘三乘は比較的對待的修行である、例へば無いと云ふ執着を捨てる爲に有ると云ふ法を示したのである、二乘三乘にては六塵を惡むのだけれども、一乘には六塵はない、凡夫が見て煩惱と思ふたのが、一乘の中へ這入ると佛の大光明である、同じ水でも牛が呑めば牛乳となり、蛇が飲めば毒となる如く、邪人正法を說けば正法も邪法となり、正人邪法を說けば邪法も、正法となる。

○六塵不惡。還同正覺。

誰やらの歌に

濁りたる水にも影を宿すかな
月の心の廣澤の池

其れぢや。

○智者無爲。愚人自縛。

一ッの悟りの目の出來た人は覺者である、覺者は佛の境界、佛の境界は無爲である、無爲と云ふても猫がジット爐邊に寢て居ると云ふ有樣が無爲ではないぞ、朝から晩まで竈に入り細に入り順境に處し逆境に處し轉

轆々地に働く上が無爲である、即ち解脫自在であるのを云ふのである、愚人は自縛です、無繩自縛である、誰れも縛ッたものはない、神も佛も誰れ一人も汝を縛ッたものはない、トコロが或る宗旨では人間たる者は神から罪の債を衣て居ると云ふが、佛法はそんな事は取らぬ、大自由大自在を得る事が出來ないのは、丁度蠶が自分の生み出した糸の爲に包まれて仕舞ふ如くに自縛するので、他處から持て來たものではない。

○法無異法。妄自愛着。

一切萬法森々羅々として居るから、何にか異なつた法

のある樣に見へるが、異法はない平等である、然るに妄りに自ら愛著して貪嗔痴慢を逞ふして居る淺間しきかな。

○將心用心。豈非大錯。

自分の心で自分の心を刺擊して居る、迷が何、悟が何であるかと、コヽヽヽ尋ねる其者は、ドヽヽであるか、多くは自分の心を以て自分の心を苦しめ縛るのである、人がコヽヽヽの頭を叩いた樣に思ふが、實は自分が自分の頭を叩たのである、向ふがコヽヽヽへ仇を爲すのは向ふを敵としたからである、彼れ我れを見て敵としたから、我れ亦彼れを敵とする、反對的に現はれた作用に過ぎぬ、向ふが我が敵であると見へるのが錯りで、向ふは我が影法師であると云ふ心があらば、笑顔である、何にも青筋を張るの必要はない、ソヽヽヽ苦しい事はない。

○迷生寂乱。悟無好悪。

空寂散亂と云ふ城を築いて實に苦しい事である、諺に借りる時の地藏顏、還へす時の閻魔顏とは好惡の情を活寫にしたものぢや。

○一切二邊。良由斟酌。

二つの側に飛び付くと執着となる、執着は何に依るか

と云ふに身から出た錆である。

○夢幻空華。何勞把捉。

金剛經に「一切有爲法、如夢幻泡影、如露亦如電、應作如是觀」とある、それぢや、向ふから腕拳を振ひ、或は拔き身を捧げて眞つ向に向つて來やうが、丁度目の先きに空華がチラツク樣なものぢや、富貴功名に對しても、そうなければならぬ、何ぞ把捉に勞せんと、玆を確かに見破らぬと、物に對して動亂するのである、不意に一大事の起ッた時に此の夢幻觀がないとキヨロ〳〵する、今息を引き取る時に當り今更の如く狼狽して死ぬるものであらうか、生きるものであらうか抔と狼狽する、此の時に當つては、イクラ財産があらうとも、人爵があらうとも役に立たぬ、所謂妻子珍寶及王位臨命終時不隨者ぢや。

○得失是非。一時放却。

ソー云ふ事は一時の夢であるから、得失だの是非だのは西の海にサラケ出せ、是の一刀兩斷の働きは平生の心の修養から現れる。

○眼若不眠。諸夢自除。

巳下四句は六魚韻ぢや、圓覺經に「始知衆生、本來成佛、生

死涅槃、猶如昨夢」とある、衆生は元來成佛して居る、故に生死だの涅槃だのと云ふは昨夜の夢の如くであると云ふ意ぢや、佛教が外の宗教と判然別なる根本義は此の一句に示されてある、苟も大乘佛教の信徒たる者は、茲で大安心をせねばならぬ、佛教を除いて外の宗教には、コー云ふ事はない、他の宗教の如く神と人間とは全然階級を異にして居る如き教と日を同ふして語るのは以つての外の事である、佛教は衆生本來成佛ぢや、是から先き即ち未來に掛けて成佛すると云ふ事とは丸で意味が違ふ、坐禪したり念佛を唱へたから成佛する

と云ふ譯でない、本來成佛である、此の見地よりして觀じて見ると、生死と涅槃とは昨夢の如してある、迷の代名詞が生死ぢや、涅槃は原語に「ニルヴァナ」と云ふ、是を不生不滅の涅槃とも云ひ、又は寂滅とも云ふ、ッマリ涅槃は悟の代名詞である、本來成佛の當體には、迷と云ふ事も悟と云ふ事もない、悟と云ふとも淺き夢なれば、迷と云ふとも夕の夢の如し、個樣に口癖に云ふけれ共、夢も容易に見るとはならぬ、眼を閉ぢて眠らねば見えないのが俗物の夢であるが、今は眼をあけて夢を見て居る、朝ムックト起きてより折旋俯仰立居振舞をして洒

掃應對進退萬事に働いて居るのが取も直さず夢なのである、或る經文に譬を以て書いてある、一人の大福長者がフツト寢た拍子に夢を見た、其夢は自身が知らぬ土地を獨り旅をして、丁度ゴビの沙漠の樣な廣漠たる處を歩行して居る、其内に纔か許り持つた糧の貯へも無くなり、さればとて何處へ往つて尋ねる人もなし、あらゆる艱難を嘗め、今にも身を投げて死んで仕舞はうと決心した、モウ迚も此の艱難に堪えず、イヨ〳〵身を捨て樣と思ひ詰めたが、そのはづみに不圖目が醒めたら、ば、難義したのでない、樂にヌク〳〵として、絹布の蒲團の上に寢て居た、實に安樂に寢て居たと云ふとがある、今日の身の上が其れだ、敢へて眠つて見る夢とは違ふ、迷と云ふ眠りが醒れば地獄も極樂もない、佛が阿難尊者を呼び出されて「阿難想陰盡者此人平常夢想消滅して寤寐合一なり」とある、是は吾宗に於ける向上の調べ事である。

○心若不異萬法一如。

異なると云ふは心に礙りが出來る故一味平等が千差萬別と變はる、如何に千差萬別と複雜なる萬象を呈して居ても、不異なれば其儘が一如である、金剛經に「是法平

等無有高下」とある、曹洞宗の道元禪師は「高處は高平低處は低平」と示された、即ち高いのは高いなりで平等、低きは低き儘平等であると云ふ茲が大事な處ぢや、一味平等と云ふと惡平等を捉へるのが凡夫の常である、彼の泰西に於て一時行はれたルーソーの説は惡平等である、其れを取り違へると斷滅の見に陷る、露國の虚無黨の如く、獨國の社會黨の如く、其或者の如く極端なる平等主義は頗る危險である、貴族退治、財産共有などゝ云ふのは、吾等所謂差別中の平等、平等中の差別と云ふ眞理が分らぬから起る誤解である、誤解しては社會に害毒を流すから慎まねばならぬ。

○一如體玄。兀爾忘緣。

是は先韻ぢや、如々不動、一味平等の事を言ひ換へて一如と云ふ、一如の本體が玄々微妙なれば、兀爾として、都ての對待を離れて聳へて居る、二より四、四より六と段々擴がつて往く萬象の上に諸緣を忘じ、其の中に居て誘惑を蒙らぬのである。

○萬法齊觀。皈復自然。

一切萬法、萬物と云ひ換へてもよい、一切萬物の複雜なる現象を心の目で見透す、肉眼で見る時は動もすれば、

我が眼と相對して爭ふ物が出來るからいけぬのである、此の處を見透すのを禪宗の言葉では一隻眼を具すると云ふて、即ち心は片目でなければならぬと云ふとである、白隱の隻手の聲と云ふのも、矢張一隻眼を開かしめるの活手段である。

○泯其所以。不可方比。

以下六句は紙の韻、佛は佛、衆生は衆生其れが其の所以である、其れを忘れた處ぢや、水は水、氷は氷、雪は雪、烟は烟、雲は雲と、各々堅くなるとすると實に八釜しいが、色々の物が融和して元の水に歸したる當體である、又、例へ

ば一の黃金を以て香爐も出來れば燭臺も出來る、又其の形にも人畜鬼佛山川草木も形ちが現はるゝけれ共一金萬器その形ちを潰せば元の純金である、方比すべからずで對待的の物ならば比べるとが出來るが、茲に至つては比べる事は出來ない、寒山詩に「我心似秋月、碧潭清皎潔、無物堪比倫、教我如何說」我心秋月に似たり碧潭清ふして皎潔と茲迄は喩へたが、結局、物の比倫に堪えたるなしと投げ出した。

○止動無動。動止無止。

元來是れが動亂の境界と寂靜の境界と二ッあるもの

ではないのである。

○兩既不成。一何有爾。

二ッ立たなければ一も立たぬ、是れは絶對界の消息を漏して居る、易の道理でも大極から兩儀を生じ、兩儀から萬物の次第に擴まるが、その大極は畢竟無極ぢやないか周茂叔の此説は佛心宗から胚胎した。

○究竟窮極。不存軌則。

以下八句職の韻、モー言葉の以て述ぶべきなく、心の緣ずべきなき境界ゆえ、究竟窮極と云ふ、一日或人が室内へ來て華嚴の四法界の道理を、クド〳〵しく畫説きす

るから(理法界、事法界、理事無礙法界、事々無礙法界)予は机上の拂子を取り擧げて是れ四法界の内か外かとやつたら、其人は茫然として退いた事がある、禪宗の本元を云ふと釋尊が靈山會上に於て八萬の大衆の面前に於て一枝の花を差出した(是が禪の歴史の始である)是を世尊拈華と云ふ、大衆は猫に小判であつたが、迦葉だけは一見して微笑した、すると如來は「我れに正法眼藏涅槃妙心實相無相微妙の法門あり摩訶迦葉に附屬す」と云はれた、マルデ見て居る八萬の大衆の面前に於て三世諸佛より相續傳來したる精神上の財産を惜氣も

なく今迦葉に讓つたのである、ソンナ譯のもので、色々の法式を要せんのである、凡そ世間は都て規則法式でなければ物言ふ事は出來ぬのであるが絶對界では規則は何にもならぬのである。

○契心平等。所作俱息。

一味平等の當體に契當せば、所作俱に息むで、あらゆる作業を仕ながらそのまゝ所作俱に息む、眞言の阿字本不生も、天台の一念三千觀も第一歩は皆な一つであるが、悟後の調べに至つて精あり麁ありぢや。

○狐疑淨盡。正信調直。

禪宗では大疑の下には大悟ありと云ふから始めより疑はねばならぬ、佛教は學問的に出來た宗教である、大抵の宗教は神の御言葉にスガレよ、少しも疑ふなよと云ふが、禪宗は根本的問題に至つて大に疑へと云ふのである、疑ひ去り疑ひ來り疑ひ破れて、豁然貫通の處に至て衆物の表裡精麁見えぬものはないぞ、正信調直とは、維摩經に「直心是道場」とある、それぢや、孟子は浩然の氣を養ふと唱へた「其爲氣也至大至剛以直養而無害則塞于天地之間」と、此の直の字に力がある、是も取て參考すべしだ。

○一切不留無可記憶。

何物も胸中に留めぬ、大海死屍を留めぬと同じ事ぢや、八萬四千の煩惱も悟りも併せて淨盡したる所である。

○虛明自照不勞心力

虛明とは心明のことで自照とは心照のことぢや、此意味からして日の光や月の光は自照ではない、心の本體のみが自照ぢや、人爲を加へたるものではないから心力を勞せずして明皓々である。

○非思量處識情難測。

一切の想像を絕し都て分別を離れた處に於て思量自

由である。

○眞如法界無他無自。

一心法界又は眞眞如とも云ふ、名目が色々あるから煩はしいか知らんが色々に働く上には名前も色々に違つて往かねばならぬ、至道と云ひ、大道と云ひ、正信と云ふ事が、眞如法界ぢや、茲に至つて我他彼此の差別はない。

○要急相應惟言不二。

急にとはイソグ意味ではない、直ちにと云ふ事ぢや、都ての階級手段を越へて、直ちに眞如界に入る、不二が得

らるれば眞如が現れるのである、不二とは佛と衆生と不二、迷と悟と不二、維摩經にては入不二法門と云ふ、此の維摩居士は自分の境界は佛樣であるが居士身を現じて大佛事を行つた偉物である、故に居士の親方は維摩である、維摩經の舞臺は檜舞臺である、維摩不二門の舞臺の大道具を眺めて見ると、廣大にして盡きざる趣きがある、病氣の時に佛が自分の御弟子を病氣見舞にやられた、その御弟子も聲聞乘の中にても勝ぐれた歴々の御弟子を使として見舞にやられたらば維摩は一々に其人を捉まへてはその境界の未熟に付て彈呵し

た、ソンナ事では迚も上求下化の大佛事を行ふ事は出來ないと云ふて勘辨した、皆なの弟子が病氣見舞に往つたはヨイが熟れも取つ締められたから、止むなく佛に復命したのである、しまいには、菩薩方が繰出して往く事に成つた、今迄役者は二乘聲聞許りであつたが、一番仕舞に文殊菩薩が出た(文殊は根本の大智惠を標したのである)今や文殊菩薩に命じて維摩の處へ見舞ひにやられた、その賓主問答往來の後遂に不二法門の幕が開かれた、丁度故團十郎の十八番なる勸進帳の一段の樣なものぢや、文殊菩薩があらゆる智惠を絞りて不

二法門の理を辨じたる後、忽ち槍頭を捩轉じて然らば貴殿の不二法門を承はらんと、詰寄せたら維摩はたつた一默であつた、一默と云ふても何も物を言はぬとは大違ひぢや、形ちの上ではだまつて居る樣であるが壁法師と云ふ人が註を加へて「維摩の一默其の聲雷の如し」と云ふた、雷と云ふても大きい音のする事ぢやなぞと思ふたらダメぢや、此の處は汗水出して工夫して見ぬと分らぬ、形の上にあると思ふたらば白雲萬里である。

○不二皆同。無不包容。

此四句の韻は冬ぢや、外の本に依れば「十方智者、皆入此宗、宗非促延」とあるが、今茲に印刷に付してある本にはない、無ければ無いで講ずる、不二は我と彼と不二、違と順と不二、憎と愛と不二、其外二つの相待は皆同じである、故に一切宇宙萬像包ね容れずと云ふとなし、即ち不二の境界を實地にやらなければいかぬ、前には文殊と維摩との對談を御話申したが、不二の境界に入れば一切萬境と自己と一つになるのである、程度の低い人々には哲理の講釋は分らぬから、只題目を授けたり、或は名號を唱へさせる、此の時は理由を問ふの必要はない、

只一心不亂になれば佛と我れと不二の境界が得られるのである、所謂打して一丸となりたる處ぢや、白隱は隻手の聲と示し、趙州和尚は「無」と唱へられた、此の無を文字に現せばナシだけれども趙州の答へはアルナシの無ではない、いはゆる不二の境界を指したのである、此の不二の境界へ實地に入る事を、天竺の言葉では三昧と云ふ、此の三昧を天台智者大師は「正受なり」と云ふて居る、迷の人は邪さまに物を受取るが悟りの上には正しく受け取るのである、耳で聲を受け目で色を受け取るのでも、乃至心に一切萬法を受取るのも皆な正受

である、それを一層適切に解釋して、「正受とは不受なり」と云ふてある、不二の境界に入ると外界の刺擊誘惑を受け付けぬ故に、明らさまに不受なりと云ふたそれが三昧の境界である、只聞た許りでは何の功もない、實際我が心に與へて修行をして見ないと分らぬ、それがいければ只一心不亂に南無阿彌陀佛と唱へてをれ、極樂往生疑なしぢや、昔し遊行寺の開祖一遍上人は聖道門淨土門何れも皆な御修行なされた御方である、尤も其頃は叡山や奈良抔は佛教大學と云ふ有樣であつて、何れの宗旨の者も皆叡山等にて學問修行なされたので

あるが、遊行寺の開祖は由良の法燈國師に就て參得し不二の境界を得られたとの事である、即ち六字の名號に迄不二の境界が及んで居る、

唱ふればわれも佛もなかりけり
南無阿彌陀佛の聲ばかりして

是が不二の境界である、其れを持つて由良の法燈國師の處へ參り、私の得たる不二の境界は個樣であると申されたれば、國師は此れを許さず、モー一歩蹈込まれよと云はれた、法華經に「寶所近きにあり」とある、更に一歩を進めよと、一遍上人も氣が付た上で、

唱ふればわれも佛もなかりけり
南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛

とやられた實に有難い話である、聖道淨土ともに寶所は同じ事である、誠に尊い事であるが、此れが分らねば佛法の妙味は分らぬ、假令天地は廣し宇宙は廣大なりとも此不二の中に優に這入るのである。

○一念萬年。無二在不在。

時間的に云へば一念萬年ぢや、空間的に云へば在と不在となしぢや、昔の昔の大昔は今咳拂ひをして居る上ぢや、又此の講釋は盡未來際を貫いて居る、時間を云へ

ばッーぢや、在と不在となしとは、此の在は目の前、不在は遠い事、彼處此處と云ふてもよい。

○十方目前。極小同大。忘絶境界。

東西南北四維上下が眉毛の上にある、即ちマッ毛の上が盡十方を貫いて居る、淨土門では西方十萬億土と云ひ、聖道門にては十方の淨土と云ふ、極小は大に同じて極小さいものも極大きいものと寸分違はぬのである、茲に至つて境と云ふ所のシキリはないから境界を忘絶すると云ふたのぢや、此所シッカリ工夫せねばならぬ。

○極大同小。不見邊表。

邊表は、ハシと、中程である、茲に於ては、はしくれの、中程のと云とはない、大小融通してある境界ぢや、維摩經には「芥子容須彌」とある、又「一毛呑大海」ともある、マッ毛の中にも富士山が這入る、是は一寸聞くと、妙な寓言であると素人は思ふかなれども、ソーではない眞理は茲にある、我々の眼睛の理を見よ、腦灰白物質を見よ、維摩は十笏の方丈と云ふて、四疊半の室に八萬四千の廣高座を入れて大宴遊會の樣な事をしたがドーぢや、此の趣きが分ッたならば趣味津津として盡きぬであらう、今

日の學者の口吻を借りて老婆説を出しても其の通りである、我々が住居で居る此の地球は二萬四千哩程あると云ふ説であるが、此の地球を假りに一時間二十哩を走る汽車に乘つて一週すると、五十日を費すのである、其れが今度は轉じて地球より月までの距離は地球の十倍であるから、此の十倍を同じ速力にて走ると、五百日程かゝるのである、此の五百日にて月の世界へ旅行するとが出來るのである、又此の地球から太陽へッナギを付けると四百倍である、其の距離を一時間二十哩の速力にて旅行する時は、五百年程かゝる、即ち此れ

が地球から太陽への旅行にて、隨分長い旅行である、處が當り前の數字上で一通りはッーであるが、五百年かゝらねば旅行が出來ないのを、光線と云ふ先生は纔か許り八分間にて太陽から茲へ飛で來る、だから人間の比較的考を以て大小遠近は想像上丈けの事である、宇宙それ自身は遠近大小でもない何でもない、茲で見て小なるものも向ふにては大である、地球にて太陽を見ると丁度鏡餅の如く見えるのであるが、太陽は少なくとも此地球程よりは大である、考えて見ると星抔でもッーである、天體の上の遊星恒星抔あり、その中には我

々の目に其光が達するには三千年もかゝると云ふとである、天文學の調べをすると限りがないが、是れは色々の器械やら顯微鏡若しくは望遠鏡にて研究した結果ぢやそうな、維摩や禪宗の説許りではない、學問が皆なゾーである、若し又、小さい方を云ふならば是れも限りがない、蚊のマツ毛に生れて生活して居る蟲みた樣なものが、昔は珍らしいと云ふたものであるが、今日は其れ等は當り前の事である、微塵なるものも色々の道具を以て見る事が出來て打ち碎いても打ち碎いても茲で御仕舞と云ふ事がないと今の學者が研究して居

る、只我々が肉眼で見えなくなると顯微鏡や望遠鏡の力に依つて見るのである、我々の眼の眸子は一分あるか半分あるか知らぬが、此の中へ三千大千世界を容れて居ると云ふてもよい、何に對して見ても映ずるのである。

佛法は科學者の研究したる學理と少しも背いて居らぬ、此の人間を宇宙大のものより眺めて見ると蛆虫見たやうに働いて居る、今此地球に人間の頭數が十五億あるとして其物共が、それ葬儀だ婚禮だ、それ儲かつた損をした、何だとか蚊だとか、ウゴメイて居るのを宇宙

よりみると、我々が蛆虫見ると同じ事ぢや。

○有即是無。無即是有。

有の韻、果して今の様な事が道理なれば、有ると云ふ事は直に無い、有ると無しと同じもの處ではない、有るがない、無いがあるぢや、昔しの人の詩的考へより「ありと見てなきは常なり水の月」と讀まれた、是れは眞空妙有と見てよい、又ヒツクリ返へして「無いと見て有るは常なり水の月」此の世界は一眞理ぢやが其れを兩面から眺めたのぢや。

○若不如是。必不須守。

大小の境界では解せられぬ、不二の境界が手に入らねば解せられぬのである守を須ひず、大と小と云ふものを別として固守して居る、心と體と別、佛と凡夫と別、神と人と別と固守して居る、笑止ぢやないか。

○一即一切。一切即一。

質の韻、指一本でも一切を概括して居る、即ち世界を容れて居る、此の世界が指一本ぢや、學問上て見ても其れなんだ、昔俱胝和尚と云ふ人は一指頭の禪と云ふて指一本を以て何でも答へた、佛とは如何と問ふ人あると、指一本を立てる、涅槃とは如何、指一本、如何是生死解脱

の境界、指一本、如何是祖師西來意指一本、其處に小僧が侍者をして居て和尚の眞似をしたのである、門前の小僧習はぬ經を讀むで、小僧が解らない事を人から尋ねられても指一本を立てる、和尚は今日は何處へ往かれたと聞いても、指一本、今日は彼岸の中日か、指一本、和尚是れを聞きァィッ生意氣な奴であると云ふて、(昔の人はヒドイ惡埒の手段を偶まには取つた)和尚或る時小僧と呼ぶ、小僧が前へ來ると直に貴樣はオレの眞似をするさうだが本當かと問はれたら、小僧は左樣で御座ると云ふ風にて例の一本の指を立てると、和尚スカサズ、ナイフでツプリと指を斬られた、其時。小僧忍痛の聲を出すやいなや和尚は聲を勵まして小僧と呼びなし指一本を立てたが、小僧は玆て不二の境界を得たのである。

○但能如是。何慮不畢。

此の境界さへ分れば能事卒れりぢや、極樂淨土も目の前であると、疊み疊んで末の結びを付けるのである。

○信心不二。不二信心。

信心の境界如何と云ふたらば不二である、不二の境界が信心である。

○言語道斷。非去來今。

言はんとすれば益々遠ざかる、昔しの今のと云ふ事はない。

ザット辯を付けて曲りなりに濟んだのである、けれ共マー凡そ大乘佛法の趣きはコー云ふものぢやけれ共學問でない修行ぢや、道理を明らめさへすれば學問は滿足するが實行が佛教故に是れが修行と云ふのである、修行すればする程蔗を嚙で漸く佳境に入ると同じ事、修すれば修する程佳境に入る。

佛法の大海は漸く入れば漸く深しであるから今後

然るべき大家に就いて師と仰ぎ切嗟琢磨するがよい、何でも厭世的の修行ではいけない、病人や隱居の者が氣休めにするのは眞の佛法ではない。

佛法は何となく藥の樣に云ふが(尤も佛を大醫王と云ふから)藥は病氣の時に必要で、其れより外に必要はないと云ふ事になるが、此の佛教は平生に必要である、不遇、不平、不幸に陷つた爲に佛法に這入ると云ふのは病的佛法ぢや、活潑に三度の飯を喰つて仕事をする樣なものである、故に佛法は藥と云ふよりも飯と云ふたがよい、毎日必要なものは藥よりも飯ぢ

やないか、「道は須臾も離るべからず離るべきは道にあらず」と云ふから此の佛法を活用して往つたならば大に利益をなすであらう。

右は明治四十年三月伊豆國下田佛教講習會（泰平寺）に於て提唱せられたる大要を波羅蜜大勵氏の筆錄せるものなり

信心銘講話（了）

信心銘講了

畫蛇添足信心銘。卷子收來意自輕

喚起壁間木上座。春風影裡問前程

鴻盟社發行書目概要

閑葛藤（米國に於ける講話集）	釋宗演禪師著	定價金七十五錢 郵稅金六錢	
碧巖集講話	大內青巒著	和裝全四冊定價金四圓五十錢 洋裝全二冊定價四圓郵稅各廿錢	
禪學批判論	忽滑谷快天著	定價錢四十五錢 郵稅金八錢	
西有禪話	西有穆山述	定價金廿五錢 郵稅金六錢	
禪學三要（三同契寶鏡三昧五位說講義）	大內青巒著	定價金參拾錢 郵稅金四錢	
謠曲禪話	大內青巒著	定價金貳拾錢 郵稅金二錢	
禪學活問答	鴻盟社編輯局	定價金廿五錢 郵稅金四錢	
碧巖集	小本全二冊	定價金五拾錢 郵稅金四錢	
信心銘拈提	瑩山禪師著	定價金廿錢 郵稅金四錢	

258
127

禪宗史要 鷲尾順敬著 定價金拾五錢 郵税金二錢

禪學大意 大内青巒述 定價金五錢 郵税金二錢

日本 **佛教史要** 境野黃洋著 定價金壹圓 郵税金拾錢

印度支那 **佛教史要** 境野黃洋著 定價金壹圓 郵税金十二錢

通俗講話 **佛教要論** 黑田眞洞著 定價金參拾錢 郵税金四錢

通俗 **佛教各宗綱要** 各宗諸大家分擔執筆 定價金壹圓五拾錢 送料十二錢

大藏法數 寂照和尚著 定價金四圓 郵税金參拾四錢

正法眼藏私記 藏海和尚 定價金五圓 郵税金參拾五錢

正法眼藏御抄 經豪和尚 定價金五圓 郵税金參拾五錢

●發行所 東京芝區露月町 振替口座二九七九 鴻盟社

明治四十年七月廿九日印刷
明治四十年七月二日發行

不許複製

編輯人 峯玄光
發行人 今村延雄 東京芝區露月町十八番地
印刷人 太田晉次郎 東京市京橋區四紺屋町二十六七番地
印刷所 株式會社秀英舍 東京市京橋區四紺屋町二十六七番地

發行所 東京市芝區露月町十八番地 電話新橋三千二十七番 振替貯金口座二九七九 鴻盟社

258
127

禪宗史要　鷲尾順敬著　定價金拾五錢　郵稅金二錢
禪學大意　大內青巒述　定價金五錢　郵稅金二錢
日本佛教史要　境野黃洋著　定價金壹圓　郵稅金拾錢
印度支那佛教史要　境野黃洋著　定價金壹圓　郵稅金十二錢
通俗講話佛教要論　黑田眞洞著　定價金參拾錢　郵稅金四錢
通俗佛教各宗綱要　各宗諸大家分擔執筆　定價金壹圓五拾錢　送料十二錢
大藏法數　寂照和尚著　定價金四圓　郵稅金參拾四錢
正法眼藏私記　藏海和尚　定價金五圓　郵稅金參拾五錢
正法眼藏御抄　經豪和尚　定價金五圓　郵稅金參拾五錢

發行所　東京芝區露月町十八番地　鴻盟社

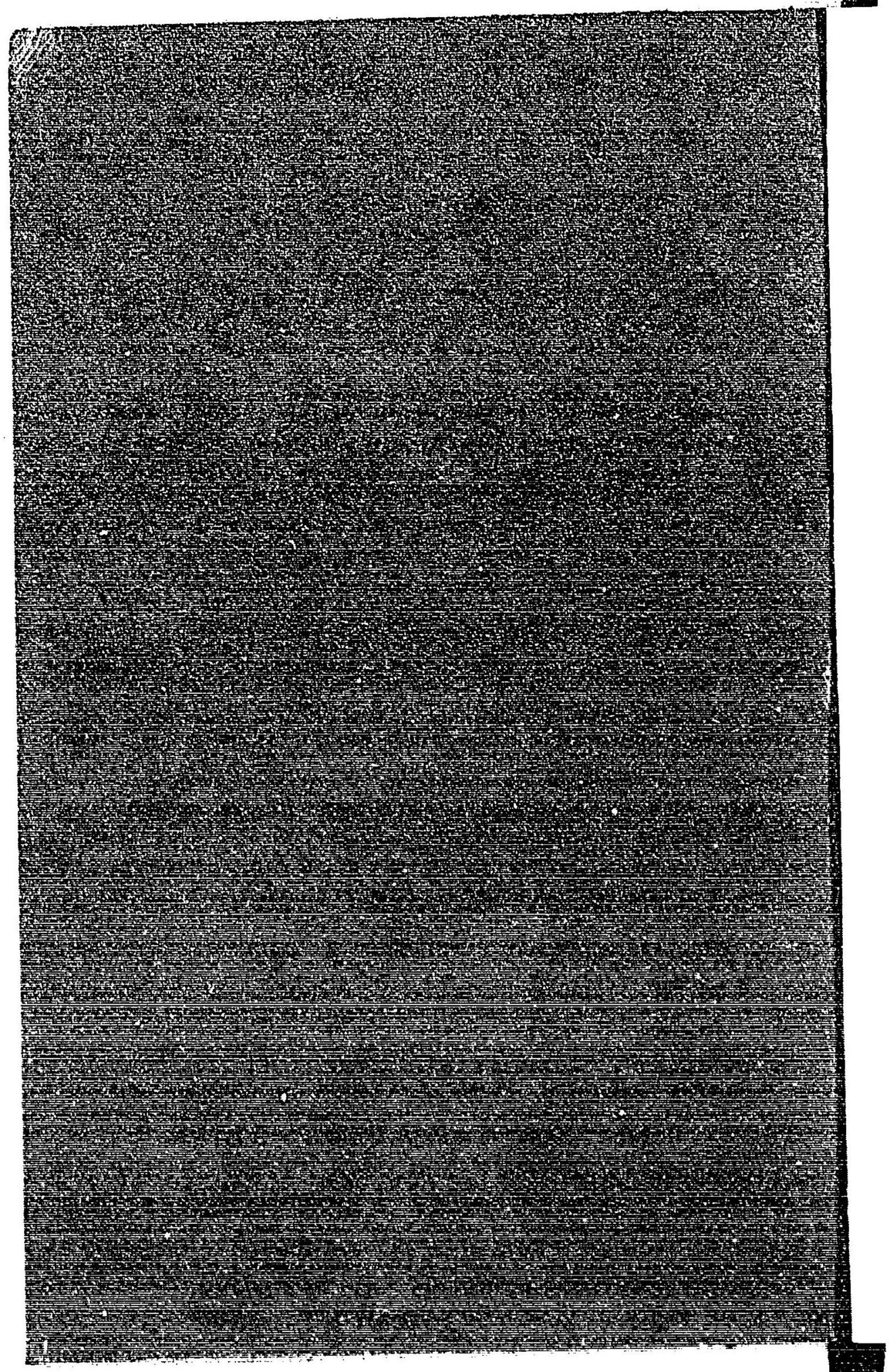
明治四十年七月廿九日印刷
明治四十年七月二日發行

編輯人　峯玄光
發行人　今村延雄　東京芝區露月町十八番地
印刷人　太田音次郎　東京市京橋區西紺屋町二十六七番地
印刷所　株式會社秀英舍　東京市京橋區西紺屋町二十六七番地

不許複製

發行所　東京市芝區露月町十八番地
電話新橋三千二十七番
振替貯金口座二九七九
鴻盟社

滿鐵社



特51
841

信心銘講話

国立国会図書館

019554-000-0

特51-841

信心銘講話

宗演／著

M40. 7

ABG-0326